認知地図にもとづく「伊豆」の範囲について

内　田　順　文

1　はじめに

一般に伊豆といえば，静岡・浜松・岳南とともに静岡県を構成する下位地域区分の名称として，あるいは，駿河・遠江と並ぶ旧国名として位置づけられる。[1] しかしながら，「伊豆」という名称の通用度は，駿河や遠江や岳南などと比べるとはるかに大きい。それは，「伊豆」というある領域を示す地域名称が，行政や経済といった専門的な地域区分名称としてだけではなく，一般の日常生活レベルでも広く普及していることによる。しかも，こうして一般に日常用いられる際の「伊豆」という名称は，静岡県の下位区分の一つとしてというより，ある程度まとまりのある独立した地域としてのイメージを表現しているのではないかと思われる。

このように「伊豆」の名称が，ある程度明確なイメージを伴いながら，都道府県の行政区分とは別に，ある特定の地域を意味している要因を考えるとき，この地域が日本有数の観光地の一つであり，その結果として「伊豆」の名称が多くのメディアによって用いられ，表現されていることを無視することはできないだろう。しかも，この地域が著名な観光地として発展してきた最大の理由は，温泉や自然景観に恵まれているという環境条件もさることながら，東京駅から数時間以内で到達できるという，首都圏への近接性にあることは疑いない。実際，この地域では，観光のみならず経済・文化などの面において首都圏との強い結びつきが見られる。つまり，行政区分上は静岡県に属することから，いわゆる中部地方に区分されていながら，機能的には首都圏を中心とする関東地方の影響を強く受けている地域なのである。[2]

こうした状況をふまえて，本論では，一般の人々が認知している「伊豆」の範囲がどのようなものなのか，それは実際の行政的な地域区分と一致しているのか，さらに，認知されている「伊豆」の範囲に関して主体の居住地，とくに地元に居住する人々と観光で訪れた他の地域の人々との間に認知地図上の差異が存在するのか，について明らかにし，その理由について考察する。認知地図あるいはメンタルマップについての研究は，近年の地理学において徐々に結果が蓄積されているが，本研究もこれら認知地図に関する一連の事例研究のひとつとしても位置づけることができよう。[3]

2　アンケート調査の方法

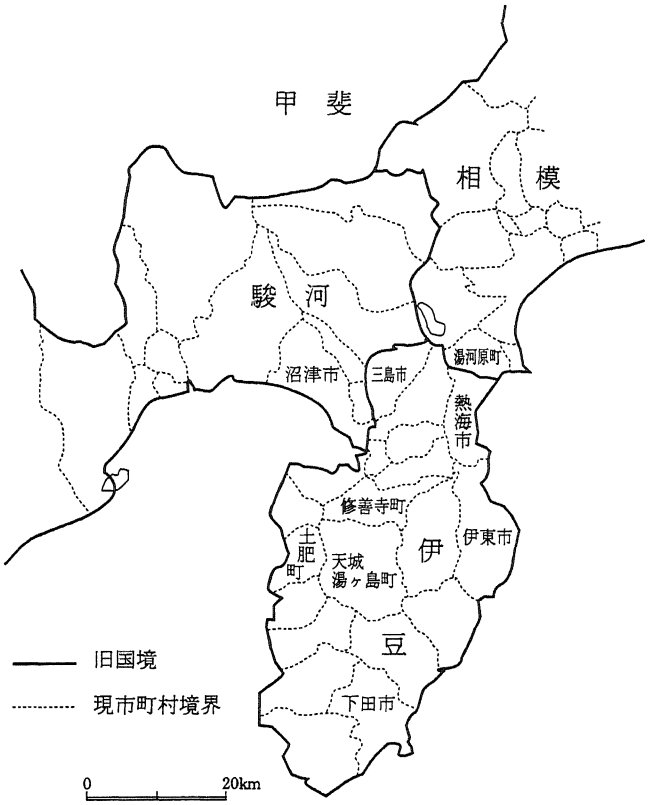
今回分析に用いるデータは，1994年12月・1995年12月・1997年９月の３回にわたって行った国士舘大学地理学教室の野外実習において，伊豆の地元民と観光客の両者に対して実施したアンケート調査によって得られたものである。アンケート調査は，日中，訪問面接法と路上面接法によって行われ，調査の実施地点は，神奈川県湯河原町・静岡県下田市（以上1994年調査）・熱海市・伊東市（以上1995年調査）・修善寺町・天城湯ケ島町（以上1997年調査）の６ケ所で，合計593名ぶんの有効なデータが得られた。

アンケート調査票の内容は，伊豆とその周辺を描いた白地図（第１図）を提示し，地図（第１図）上に被験者の考える「伊豆」の範囲を実線で書き込むように求めたものである[4]。同時に，フェイスシートとして被験者の年齢・性別・現住所についても回答を求めた。

第1図　アンケート調査に用いた白地図

ちなみに，現在旧伊豆国の領域には，三島・熱海・伊東・下田の４市と15の町村が属しているが，「伊豆」の名称がかつての伊豆国と同じ領域を意味するとすれば，第２図の伊豆を囲む太い実線がその境界となり，熱海市・三島市以南は「伊豆」に属するが，相模に属する湯河原町と，駿河に属する沼津市の主要部は，ともに「伊豆」の範囲外となる[5]。

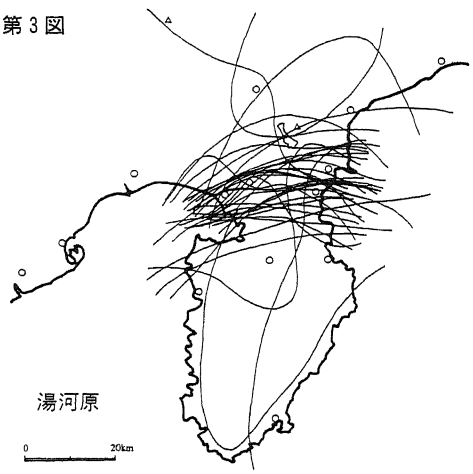
第２図　調査対象地域付近の旧国境・現市町村境界



3　居住地による認知地図の特徴

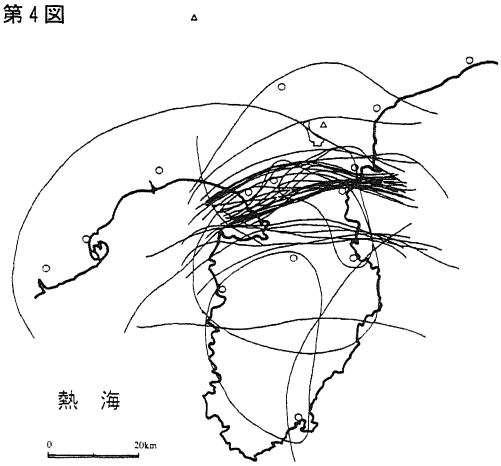
第３～９図は，被験者の居住地別に，それぞれ湯河原・熱海・伊東・修善寺・天城湯ケ島・下田の各住民と伊豆以外の地域から訪れた観光客の，全ての描線データを重ねて地図化したものである。

第３図



第３図は湯河原の住民が回答した描線を重ねて示したものであるが，伊豆地域在住の人々が回答した描線の中では最もばらつきが大きい。とくに，湯河原の北側に線を引いている事例の多い点が異なる。湯河原の住民であればほとんどの人が，自分たちの町が神奈川県に属し，旧伊豆国には属さないことを知っ

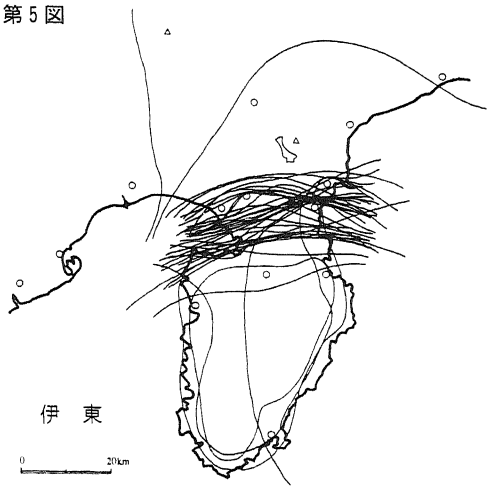
第4図



ているものと思われるので，それを承知のうえで敢えて「伊豆」の範囲内に入れていることになる。

これに対し，その湯河原と隣り合った熱海の住民の回答（第4図）になると，湯河原を「伊豆」と見なす意見は激減し，描線の大部分は湯河原と熱海の間に集中している。これは，熱海の住民が湯河原・熱海間に伊豆・相模の国境（それは現県境でもある）のあることを明確に意識していることを示している。後述するように，熱海と湯河原は隣接し，しかも同じ温泉観光地ということもあって，観光客の中には両者を混同し，ともに伊豆の温泉として一括りに理解している人も少なからずいるが，そのことに対する反動という一面もあるのであろうか。しかしその一方では，湯河原はもちろん熱海自体も「伊豆」の域外だと考えている人々も少なからず（20%程度）存在している。

第5図



伊東の住民の回答（第5図）も，熱海の住民のそれとだいたい同じ特徴をもっているが，熱海・伊東間に境界線を引く事例が，熱海のそれより明らかに多くなっている点が異なっており，その影響で伊豆半島の狭隘部（いちばん幅が狭くなっているところ）を東西にほぼ一直線に結ぶ事例が目立つ。これは，東海道の主要幹線が通る熱海や三島は「伊豆」への入口であって，本当の「伊豆」は幹線から離れた奥まったところにある，という認識を表しているとも考えられる。

修善寺の住民の回答（第6図）は，北の方には多少のばらつきが見られるものの，最も描線が集中しているのは湯河原・熱海間から三島・沼津の北側にかけての，ちょうど東海道本線が走っているあたりで，熱海や伊東の住民と比べると，全体的に線が北にあり，三島・沼津を含んだより広い領域で「伊豆」を捉える傾向がみえる。これとは別に，内浦湾と伊東を結ぶ南よりの描線の存在も明瞭に現

れている。なお，すべての回答者が自分の居住している修善寺を「伊豆」であると見なしている。

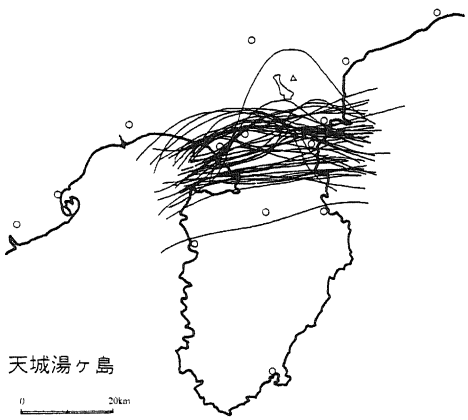
天城湯ケ島の住民の回答（第7図）は，7枚の図の中ではもっとも線のばらつきが少なく，ほぼすべての描線が伊豆半島の付け根付近の南北幅20km の帯の中に収まっている。修善寺の住民の場合と同様，熱海や伊東の住民と比べて全体的に描線が北にあり，三島・沼津を含んだより広い領域で「伊豆」を捉える傾向がみえるが，描線の大部分は伊豆半島の付け根の狭隘部までに集中している点が修善寺の場合とは異なる。すべての回答者が自分の居住する天城湯ケ島を「伊豆」と見なしている点は，修善寺の場合と同じである。

下田の住民の回答（第8図）は，伊東の住民の回答と非常によく似ている。下田は伊豆半島の南端付近に位置しているが，伊豆半島の南半のみを「伊豆」と見なすような例はほとんどなく，他の地域の場合と同様，半島の付け根周辺に描線が集中している。

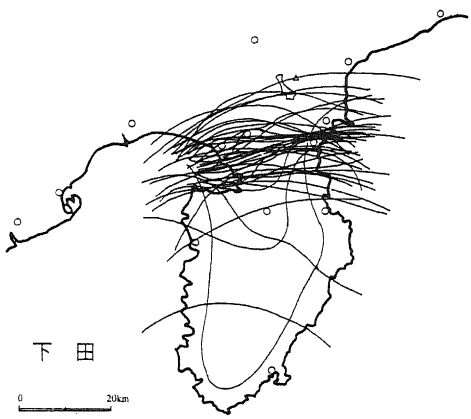
第3図から第8図までの地図が伊豆地域に居住する人々の回答結果だったのに対し，第9図は地元住民ではない観光客が回答した描線である。(6) 地元の人々の描線と比べると，北は小田原・御殿場・静岡を含む広大な範囲を含むものから，下田周辺し

第6図

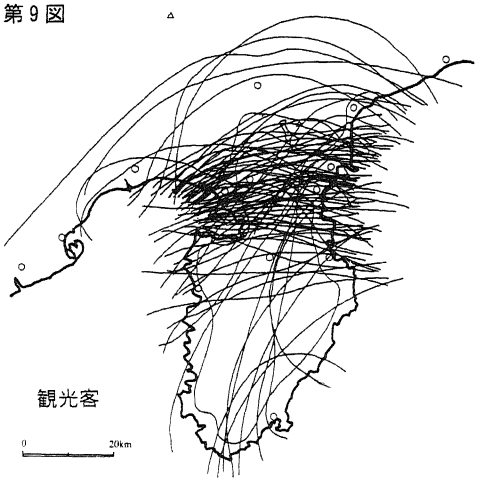
第7図



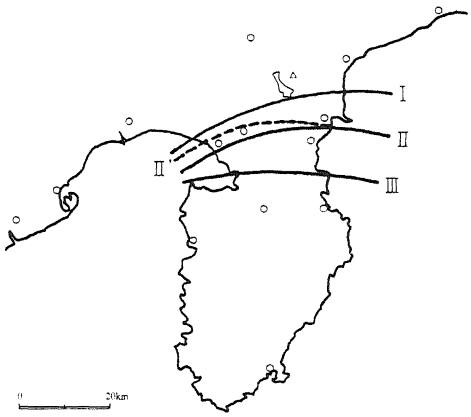
第8図



第9図



第10図　描線の三つのパターン



か「伊豆」と見なさないもの，東海岸のみのものなど，非常にばらつきが大きく，個人差が大きい。これは伊豆に住んでいるわけではない観光客にとって，「伊豆」は身近な場所ではなく，伊豆に関する情報や知識についても当然不足している人が多数混じっているためであると考えられる。しかしながら，描線の90％以上は小田原・富士を結ぶ線の南側，伊東・土肥を結ぶ線の北側に引かれており，大多数の人の「伊豆」の範囲に関する認識は地元の人とそれとほとんど違わないことがわかる。

以上の結果を総合すると，被験者全体に共通する描線のかたちには，大きく三つのパターンが存在するようである。すなわち第一に，湯河原・三島・沼津をいずれも「伊豆」と見なし，この3地点の北側に描線を引くもの（第10図中のIのライン），第二に，上記3地点をいずれも「伊豆」と見なさず，湯河原の南側から三島・沼津の南側にかけて描線を引くもの（第10図中のIIのライン），第三に，上記3地点に加えて熱海も「伊豆」と見なさず，伊豆半島の付け根の狭隘部に描線を引くもの（第10図中のIIIのライン），の3種である。なお，基本的に「伊豆」の東端については県境でもある湯河原・熱海間でほぼ一致しているものの，西端については少しばらつきが大きくなることから，二番目のパターンの変形として，湯河原の南側から三島または沼津の北側にかけて描線を引くもの（第10図中のIIのライン）を加えてもよいかもしれない。

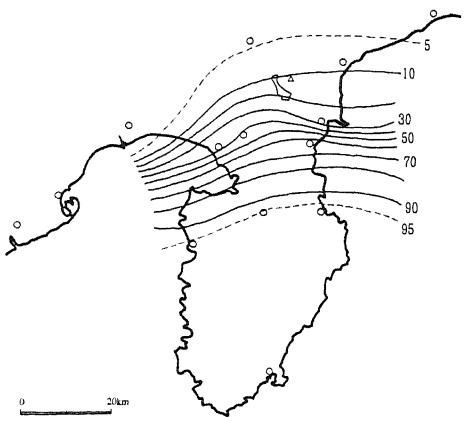
要するに，「伊豆」と認識される範囲の優先順位として，下田・土肥・修善寺・伊東はまず確実に「伊豆」の領域内と見なされ，次に熱海，次に三島と沼津，最後に湯河原，という順序で描線は北上していく傾向がある。居住地によるそれぞれの回答に表れた特徴の違いは，概ねこれら3種類のラインのどれが卓越するかという点に還元できるのではないだろうか。

また，基本的に自分の居住地を「伊豆」と見なす傾向が強いので，居住地が南にあるほど，一般に「伊豆」の北限は南下する。ただし，これはいわゆる「伊豆」の境界線付近に位置する湯河原・熱海・伊東・修善寺などでは見られるものの，下田の場合は当てはまらない。全被験者を通じて伊豆半島の南へ行くほど「伊豆」であるという認識は強くなっていくことから，下田の居住者にとって自分の町が「伊豆」に含まれることは自明の理であり，そのぶん熱海や伊東の居住者より「伊豆」の範囲についても，より客観的に考えることができるからかもしれない。

4　居住地によるクロス表分析

本来アナログデータである描線を統計的な分析が可能な形にするためには，数値データあるいはカテゴリーデータのかたちに変換する必要がある。今回は，あらかじめアンケート用紙の白地図上に記載してある二宮・小田原・湯河原・熱海・伊東・下田・三島・修善寺・沼津・土肥・富士・清水・静岡・御殿場・箱根山・富士山の16地点（第１図参照）について，各被験者が記入した描線をもとに，その被験者が「伊豆」と見なしている範囲に含まれるか否かを判定することによって，「伊豆に含む」と「伊豆に含まない」のバイナリー（01型）データに変換した。この手順でバイナリー型に変換された593名ぶんのデータを集計したうえで，各地点について「伊豆に含まれる」と判定されたケース数が全ケース数に対して占める割合（％）を，その地点の「伊豆」としての認知度とみなすことにする。

第11図　認知度の等値線図



第11図は，各地点の認知度をもとに，地図上に認知度の等値線を描いたものである。この図によれば，伊東～修善寺～土肥を結ぶ線のやや北方までは誰もが「伊豆」の範囲内と認知しているものの，そこから北へ向かうに従ってほぼ単調に「伊豆」としての認知度は下がっていき，小田原付近～箱根～沼津西方を結ぶ線の北側になると，ほとんど「伊豆」とは認知されていない。つまり「伊豆」を他の地域と区切る境界線は，伊豆半島の付け根にあたる狭隘部を中心に，やや北向きに湾曲しながら東西にのびる，幅約20km の漸移地帯に存在していることがわかる。

ただし，駿河湾沿いでは土肥から沼津の西方に至るまでほぼ同じ傾きで認知度が下がっていくのに対し，相模湾沿いでは湯河原と熱海の間に認知度の急変点が

あり，この部分だけは「伊豆」の境界線として強く認識されている。

この結果は，旧伊豆国と相模・駿河の境界線（同時にそれは神奈川と静岡の県境でもあるが）が湯河原・熱海間に存在していることとある程度符合している。認知曲線のわずかな北方向への膨らみも，旧国境線の位置を反映しているとみることもできよう。しかし，実際の国境が三島の西方でＳ字型に南に折れ，湾奥部で海岸線に至る点については，まったくと言っていいほど反映されていない。三島と沼津との間にほんのわずかではあるが曲線がカーブを描いていることが，そのかすかな名残りであろうか。

次に，イメージされている「伊豆」の範囲が主体の居住地によって異なるかどうかをクロス表分析によって検証する。第１表は，湯河原・熱海・三島・沼津・伊東・修善寺・土肥・下田の８地点について「伊豆に含む」か「伊豆に含まない」かの認識の違いを，地元住民の居住地（湯河原・熱海・伊東・修善寺・湯ケ島・下田の６ケ所）ごとに分けてクロス表にしたものである。χ^2 検定の結果をみると，熱海の居住者３人のみが伊豆に含めなかった下田についてだけには有意な差が認められたが，他の７地点については有意な差は認められず，伊豆近辺に居住している地元の人々には，その居住地にかかわらず，「伊豆」の範囲に関する限り，だいたい同じようなイメージを持っていることがわかる。

第１表　「伊豆」の範囲の認識の違いと地元住民の居住地とのクロス表および χ^2 検定の結果

	湯河原		熱　海		三　島		沼　津		伊　東		修善寺		土　肥		下　田		計
	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	
湯河原	12	33	33	12	20	25	20	25	44	1	44	1	42	3	45	0	45
%	26.7	73.3	73.3	26.7	44.4	55.6	44.4	55.6	97.8	2.2	97.8	2.2	93.3	6.7	100.0	0.0	100.0
熱　海	8	38	37	9	17	29	16	30	45	1	44	2	44	2	43	3	46
%	17.4	82.6	80.4	19.6	37.0	63.0	34.8	65.2	97.8	2.2	95.7	4.3	95.7	4.3	93.5	6.5	100.0
伊　東	5	42	33	14	15	32	13	34	46	1	44	3	45	2	47	0	47
%	10.6	89.4	70.2	29.8	31.9	68.1	27.7	72.3	97.9	2.1	93.6	6.4	95.7	4.3	100.0	0.0	100.0
修善寺	8	53	42	19	30	31	27	34	61	0	61	0	61	0	61	0	61
%	13.1	86.9	68.9	31.1	49.2	50.8	44.3	55.7	100.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	100.0
湯ケ島	7	63	46	24	28	42	20	50	70	0	69	1	70	0	70	0	71
%	10.0	90.0	66.7	33.3	40.0	60.0	28.6	71.4	100.0	0.0	98.6	1.4	100.0	0.0	100.0	0.0	100.0
下　田	7	38	28	17	11	34	14	31	43	2	41	4	44	1	45	0	45
%	15.6	84.4	62.2	37.8	24.4	75.6	31.1	68.9	95.6	4.4	93.2	6.8	97.8	2.2	100.0	0.0	100.0
計	47	267	219	95	121	193	110	204	309	5	303	11	306	8	311	3	314
%	15.0	85.0	69.7	30.3	38.5	61.5	35.0	65.0	98.4	1.6	96.5	3.5	97.5	2.5	99.0	1.0	100.0
χ^2	6.25		4.61		8.65		6.42		3.05		5.71		10.26		15.49		
有意確率															**		

*　有意確率5%で有意
**　有意確率1%で有意

ところが，同じ８地点について「伊豆に含む」か「伊豆に含まない」かの認識の違いを，地元住民と他の地域から来た観光客との間でクロス集計し，χ^2 検定を行うと，湯河原・熱海・伊東・土肥の４地点で有意な差が認められた（第２表）。とくに，湯河原を「伊豆」の範囲内に含めるか否か，については両者の間でもっとも意見が分かれており，観光客の約30%が神奈川県（相模）に位置する

第2表 「伊豆」の範囲の認識の違いと被験者の居住地とのクロス表およびχ^2検定の結果

	湯河原		熱海		三島		沼津		伊東		修善寺		土肥		下田		計
	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	含む	含まない	
地元民	47	267	219	95	121	193	110	204	309	5	303	11	306	8	311	3	314
%	15.0	85.0	69.7	30.3	38.5	61.5	35.0	65.0	98.4	1.6	96.5	3.5	97.5	2.5	99.0	1.0	100.0
観光客	81	198	171	108	122	157	114	165	267	12	261	18	261	18	273	6	279
%	29.0	71.0	61.3	38.7	13.7	56.3	40.9	59.1	95.7	4.3	93.5	6.5	93.5	6.5	97.8	2.2	100.0
計	128	465	390	203	243	350	224	369	576	17	564	29	567	26	584	9	593
%	21.6	78.4	65.8	34.2	41.0	59.0	37.8	62.2	97.1	2.9	95.1	4.9	95.6	4.4	98.5	1.5	100.0
χ^2	17.64		1.34		1.80		2.34		3.89		2.32		5.82		1.82		
有意確率	**		*						*				*		**		

* 有意確率5%で有意
** 有意確率1%で有意

湯河原も「伊豆」の一部だと認識しているのに対して，地元の人々の数値は15%と半減する。なお，有意な差こそないものの，三島・沼津についても，「伊豆」と見なさない人の割合は観光客より地元の人のほうが多く，観光客のほうが「伊豆」の範囲を総じて広めにとる傾向のあることがうかがわれる。

一方これとは逆に，熱海・伊東・土肥の3ケ所に対しては，これらを「伊豆」と見なす人の割合が，地元の人より観光客のほうが少ないことによって有意な差が生じており，少数派ではあるが「伊豆」の範囲を狭くとる人も観光客のほうに多い。これは，地図のうえの形状から半島の付け根にある狭隘部以南を「伊豆」として認識している人が，観光客のほうにより多いことに起因している。

なお，被験者の性別および年齢についても同様のクロス表分析を行ったが，いずれの場合にも有意な差は認められなかった。

5 まとめ

もし仮りに，「伊豆」の範囲が旧伊豆国の領域に等しいというのであれば，今回のアンケート調査に対し，湯河原を含めず熱海を含め，沼津を含めず三島を含めるような曲線を引けば，それが最も望ましい回答ということになるのであろう。しかし実際には，そうした形の曲線を引いた人も多少はいたものの，観光客はもとより，地元の人々についてさえ，正解ではない回答のほうが圧倒的に多かった。これは，単に地域区分に関する知識の不足が原因となっている面も確かにあるだろうが，むしろそれより，現在の「伊豆」のイメージが，必ずしも旧伊豆国のそれと一致していなかったことが反映されているとみるべきではないだろうか。

たしかに，湯河原が「伊豆」に含まれるか否かの認識において，地元の人々と観光客との間に明らかな差異がみられた最大の理由は，地元の人が静岡県と神奈川県の境界（すなわち伊豆と相模の境界）が熱海と湯河原の間に存在することを知っているのに対し，よそ者である観光客にはそういった細かな行政区界など意識になく，熱海も湯河原も同じ温泉観光地として一括りに「伊豆」として理解していることに求められよう。しかし，実際には湯河原を「伊豆」と認めた地元民が15%もおり，なによりも約7割の観光客は「正しく」湯河原を「伊豆」から除

外しているのである。

同様のことは，歴史的には伊豆とはいえない沼津についてもあてはまる。すでに結果にあらわれたように，伊豆と相模の境界が現在も県境としてある程度効力があるのに比べ，伊豆と駿河の境界については，地元の人ですら実質的な境界とはなっておらず，日常生活においてほとんど意識されているとは思えない。

第11図を見てもわかるとおり，データの約半数は観光客によって占められているにもかかわらず，結果はわりと狭い地帯に集中している。むしろ地元の人も観光客（それが伊豆を訪れている観光客であることを考慮したとしても）も「伊豆」の認識という点においては，それほどの差がないことのほうが注目すべき点なのではなかろうか。

伊豆のような旧国名が観光と結びつく例は，「みちのく（陸奥）」「甲斐路」「信州」「能登」「日向」など，日本中に見られる。そのほとんどは，1970年代後半，石油ショック以降の観光の地方化に伴い，マスメディアを中心にあちこちで盛んに用いられるようになった。それは，青森県や山梨県や長野県などといった現在の行政区分名称ではなく，昔の地域名称を用いることによって，「古さ」「懐かしさ」「あたたかさ」といった，反都市的なイメージを与えるからにほかならない。したがって，現在の旧国名のイメージは，必ずしも古代に定められた旧国のイメージと同じであるはずもないし，またその必要もない。むしろ，名称こそ古めかしいが，その実体は観光戦略によって新たに作り出されたイメージであると考えるべきかもしれない。ましてそれが示す範囲ともなれば，なおさらである。

第3表は，現在市販されている主な国内観光ガイドブックのうち，伊豆のみを取り上げて1冊の本にしているものについて，そのガイドブックが記載している観光地の範囲を調査した結果である。これによれば，熱海・三島・沼津の3都市については，調査した9冊のガイドブック全てが扱っていたのに対し，湯河原については9冊中2冊のみが扱っているにすぎなかった。(7)

つまり，現行の観光地としての「伊豆」には，旧伊豆国内に位置する三島・熱

第3表　主要観光ガイドブックにおける記載の有無

ガイドブック名	出版社	記載の有無			
		湯河原	熱海	三島	沼津
ニューガイド私の日本14　伊豆	弘済出版社	×	○	○	○
JTBのポケットガイド24　伊豆	JTB	○	○	○	○
iじゃぱん20　伊豆	JTB	○	○	○	○
ブルーガイドニッポン14　伊豆	実業之日本社	×	○	○	○
ブルーガイドパック13　伊豆	実業之日本社	×	○	○	○
上撰の旅13　伊豆	昭文社	×	○	○	○
旅・王・国16　伊豆	昭文社	×	○	○	○
エアリアマップ・マップルガイド17　伊豆	昭文社	×	○	○	○
歩く地図S 9　伊豆	山と渓谷社	×	○	○	○

○　当該ガイドブックに記載あり
×　当該ガイドブックに記載なし

海以南の地域が含まれるのに対し，相模に属する湯河原は含まれないことが多いのである。ところがこれに対して，同じように駿河に属する沼津は「伊豆」と見なされている。市販の観光ガイドだけではない。静岡県・静岡県観光協会が出している公式の観光パンフレットにおいても沼津市は土肥や松崎と同じ西伊豆地域の観光地として扱われている（ただし，「伊豆西海岸地区」という名称を用いている[8]）。

たしかに現行の行政区分では，湯河原と違って沼津は伊豆と同じ静岡県に属することが，両者の扱いにこれほど大きな差異を生じさせた面は多分にあるのだろうが，沼津が伊豆の一部として紹介されている原因はそれだけだとは思えない。

伊豆地方は急峻な山がちの地形であることから，主要な観光ルートは，伊豆半島の東西の海岸部を南下するか，狩野川沿いに山間部へ入っていくかの3本しかない。一般に観光地としての伊豆地域が，東伊豆・中伊豆・西伊豆に分類されているのはそのためであり，実際に全ての観光ガイドブックが，この北から南へ向かう3本のルートに従って伊豆を地域区分している。そして，それぞれのルートの入り口として東海道本線（新幹線）・国道1号線（東名高速道）という幹線から分岐する結節点として，熱海・三島・沼津が位置づけられているのである。こうした条件の中で，熱海と三島が「伊豆」である以上，沼津だけ「伊豆」ではないというのは多少不自然に感じられているのではないだろうか。むしろ観光地としての経済的機能から見れば，沼津は当然「伊豆」の一部となっているということなのであろう。

今回の調査結果から，「伊豆」と認識される範囲の優先順位として，下田・土肥・修善寺・伊東はまず確実に「伊豆」の領域内と見なされ，次に熱海，次に三島と沼津，最後に湯河原，という順序で描線は北上していく傾向があること，地元の人と比べて観光客のほうが「伊豆」の範囲を総じて広めにとる傾向があり，とくにそれは湯河原を「伊豆」の範囲内に含めるか否か，について両者の間でもっとも意見が分かれること，などが明らかとなった。しかし，今回はデータ上の制約もあって，必ずしも十分な分析ができたとは言いがたい。とくに沼津市と三島市での調査結果がないことによって，「伊豆」の西の境界線となる駿河との関係については推測するだけにとどまった。今後，この地域でデータを得る機会があれば，その結果を加えることによって，さらに正確な分析を試みたい。

注

（1） 青野寿郎・尾留川正平編「日本地誌11　長野県・山梨県・静岡県」二宮書店，1972.

（2） 近世において伊豆国は関八州の外であり，相模以東のいわゆる関東地方の域外にあったが，1871（明治4）年7月の廃藩置県時に設置された韮山県が，同年11月には足柄県（現在の神奈川県西部）に編入されたため，一時は関東に帰属した。しかし，1876（明治9）年に足柄県が神奈川県と統合した際，旧足柄県（伊豆国）は静岡県へ

編入され，県境は再び湯河原・熱海間に引かれることになる一方，伊豆・駿河間の国境は実体を失うに至った。これに対し，1880年代以降，伊豆を静岡県から神奈川県に移管させる運動が何度か起こったが，実現はしなかった。

（3） 認知地図およびメンタルマップの研究成果については，中村豊・岡本耕平「メンタルマップ入門」古今書院，1993. に詳しい。

（4） 白地図上の描線を用いた認知地図の研究の例としては，小俣利男「日・英における児童・生徒のソ連認識に関する比較分析」新地理36－2，16-25，1988. などがある。

（5） 1955（昭和30）年に本来伊豆国田方郡に属する内浦村と西浦村が沼津市に合併編入された結果，実際には沼津市の一部が旧伊豆国の一角を占めることになった（第2図参照）。

（6） 観光客の描線データの合計は279であったが，これを全て重ねると図が見にくくなるため，描線の数を全データの3分の1ほどに減らして作図してある。

（7） ほとんどのガイドブックにおいて，湯河原は「箱根」の巻に含まれている。

（8） 静岡県・静岡県観光協会「静岡県観光ガイドブック」1999.

（本学助教授・地理学）

九七